

# フレーベルと東独

——フレーベルの遺跡を訪ねて——

坂元彦太郎

## 一、フレーベル記念祭への招待状

次に掲げたのは、東ドイツにおけるフレーベル記念祭への招待状を、拙訳抄録したものである。主催者——ゲラ地区（ブランケンブルグ、ルドルシュタットを含む）、スール地区（リーベンシュタイン、シュワイナ）の教育責任者、ならびに、東ドイツの教育科学アカデミー教育史部会委員長の三者連名による招請である。

これを私が入手したのは、この日が過ぎた、いわばあとであつたが、これを見るだけでも、東ドイツがフレーベルをどのように受けとめ、育てていこうとしているか、が察知さ

れ、フレーベルゆかりの個所がどんなところにあるか、なども知ることができよう。また、アトラクションというより、もっと重大な位置を占めるものとして、モーツァルト、ベートーヴェンの曲などが演奏されることもまた、興味ぶかく感じるものの一つである。

この招待状に出てくる地名のうち、フレーベルの墓のあるシュワイナ、死の直前まで幼稚園やその教員養成所をやつていたリーベンシュタインには、残念ながらこの度は訪れることができなかった。が、彼の生地のおーベルヴァイスバッハに行つたのがせめてものことであつた。

また、この招待状の表紙の裏には、ドイツ社会主義統一党

## フレイベル記念祭

1977

古典的な市民的教育学者にして幼稚園の創始者である  
フリードリヒ・ウィルヘルム・アウグスト・フレイベル  
の百二十五年忌に当り、一九七七年六月十九日より二十一日  
までバート・ブランケンブルグ、ルドルシュタット、ならび  
に、シュワイナ、バート・リーベンシュタインにおいて、フ  
レイベル記念祭を挙行します。失礼ながら、心から御招待申  
しあげます。

### プログラム

六月十九日

一四・〇〇——一六・〇〇（バート・ブランケンブルグ  
において）

幼児祭り（フレイベルの「幼稚園祭り」  
において）

フレイベル博物館

フレイベルハウス幼稚園一、二 訪問

フレイベル思い出の場所

一六・三〇——一八・〇〇（フレイベル上級学校講堂）

記念集会 講演 フレイベルの教育学における進歩的

な遺産 K・H・ギユンター

演奏 シューマン、ベートーヴェン曲（ル

ドルシュタット弦楽四重奏団）

の綱領の一部が引用されていて、ドイツ民主共和国（これを  
私たちは東ドイツをいつている）ドイツ民族のすべての過去  
の偉大なもの、文化遺産を受けつぎし、高貴なもの、ヒュー  
マニズム、革命的なものすべてを尊重し、育てていく、と  
いった趣旨が述べてある。裏表紙には、フレイベルの『人間  
教育』から、その目的についての有名な一節が掲げられてい  
る。このことでも、フレイベル等に対する東独の態度をうか  
がうことができるであろう。

なお、この度の旅でしばしば聞かされたことは、一九八二  
年のフレイベル誕生二百年のときには、盛大なお祝いをする  
から、是非、参加してくれ、ということであった。

以下、この度の旅で見聞したり、感じたりしたことを、か  
んたんに述べることにしたい。

### 二、ブランケンブルグとフレイベル

私たちが、バート・ブランケンブルグを訪れたのは、昨年  
六月一日、実は、このような催しが準備されていたようとは、  
夢想さえしていなかった。いまの、東独の人たちが、フレイ  
ベルの人や思想をどのように考え、さらには、はるばる訪ね  
てきた日本人を、どのように迎えるだろうか、と、私たちは

一八・三〇 (フレibel上級学校) 一般晩餐会

二〇・〇〇 (ルドルシュタット城ロココ広間において)

記念演奏会(ルドルシュタット劇場管絃乐团)

モーツァルト アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク

ドヴォルザーク 管楽器のためのセレナーデ

ベートーヴェン ヴァイオリン協奏曲

六月二十日

九・〇〇——一二・〇〇 (フレibel上級学校講堂)

シンポジウム(司会 ヘルムート・ケーニヒ)

フレibel遺産の取得と育成——われらの責任と任務

一二・〇〇(「ラート・ケラー」、市庁舎食堂 一般昼食会

一三・三〇 バスにて出発(リーベンシュタインへ)

一七・三〇——一九・〇〇 (リーベンシュタインのク

ル劇場)

記念集会 講演 労働運動とフレibelの進歩的教育

学の遺産 ヘルムート・ケーニヒ

演奏 シュマルカルデン師範学校生徒

クール劇場管絃乐团

六月二十一日 九・〇〇 (シュワイナ)

フレibel墓前花輪献呈

記念講話 ハラルド・ヘーネル

一〇・一五(シュワイナ、バート・リーベンシュタイン)

フレibel思出の場所視察

美しい並木道を、ひろびろとした原野や、森林を通り過ぎるバスの中で、いろいろな思いにふけていた。

前夜、東ドイツ南部の都市エルフルトに泊った私たちが、さらに南下して、バート・ブランケンブルグに着いたのは昼近くで、早速、市庁舎の食堂で昼食をとることになった。これが、招待状にある「ラートケラー」すなわち、市庁の地階の食堂である。

ところが、その入口の横の壁に、一枚のパネルがはめこまれてあった。読むと「この市庁舎広間において、フリードリヒ・フレibelが、一八四〇年六月二十八日、ドイツ幼稚園を創設した」とある。うっかりすると、ここが世界最初の幼稚園であったかのように受け取られるが、実は、この日(グーテンベルグ五百年祭に当る)に、ここで、「一般ドイツ幼稚園」と訳されている、団体、もしくは連盟みたいなものを、多くのいろいろな人を集めて、結成したのである。こうして、フレibelが考えている幼稚園を普及し、その精神をひろめようという運動の母体をつくり、その後、ひろく宣伝にのり出すのである。

バートとは温泉のこと、フレibelが世界最初の幼稚園を開いたこの町は、いまは静かな保養地となっている。大きな

道が中心を走り、ゆったりとしたたたずまいの住宅がならん  
でいる。ある脇路の突き当りに、いまのフレイベル博物館が  
あった。地階には幼稚園があり、おそらくこれが第一か、第  
二かのフレイベルハウス幼稚園であろう。日本流にいえば、  
二階と三階に、フレイベルゆかりの品がいろいろ陳列してあ  
った。フレイベルの居室に模した部屋もあり、彼が使った調  
度や、愛妻ウィルヘルミネの肖像などがあった。

陳列室に入って、最初に私の眼をとらえたのは、フレイベ  
ルの大きな肖像とならんで、彼を讃えた大きな揭示であっ  
た。それには次のような趣旨のことが述べてあった。「私た  
ちがフレイベルを尊敬するのは、彼が、(一)進歩的な教知の代  
表的な存在であったこと、(二)行動的な愛国者であったこと、  
(三)民衆と直結した国民教育者の典型であったこと、(四)偉大な  
学者で教師であったこと、である」そして、そのそれぞれに  
説明が加えられている。その他、「社会主義教育における幼  
児教育の最大の先駆者」としてのフレイベルをたたえようと  
いう意図のもとに、さまざまな陳列がしてあった。

こうしたイデオロギイ的な立場はともかくとして、フレイ  
ベルが、はつきりと東ドイツにおいて存在の意義が認めら  
れ、それをもとにして、いつその展開をはかろうとする熱

意を受け取ることができた。

この博物館は、戦前に訪れた人たちの記録にあるものとは  
全く別のまだ、新しいもので、最近引越してきたものであ  
る。前の博物館は、後に私たちはその前を通り過ぎたが、彼  
の没後、彼の精神で建てられた幼稚園と同居していたよう  
であるが、いまは、その建物は古くなっていて修理中であり、  
この記念祭までには修理を終えるとのことであった。おそらく  
これが第一か、第二かのフレイベルハウス幼稚園なのであ  
ろう。

この博物館から出てきて記念の撮影をしているときに、一  
人の品のいい老人が現れて私たちに話しかけた。そのときは  
よく聞きとれなかったが、その老紳士は、フレイベルの高弟  
パロップのゆかりの者だ、という。そして、私たちを記念の  
場所に案内しよう、と先に立って、歩き出したのである。

博物館から、数分歩いて、広い道を横切り、小川の橋をわ  
たり、ちょっとした林をくぐり抜けると、そこには、球・円  
筒・正方形の石を積んで建てた、フレイベルの記念碑がたっ  
ていた。

形はフレイベルの墓標にそっくりであるが、また、ま新し  
いものである。ここは、フレイベルが「幼稚園祭り」を催し

たところで、それを記念して、最近、ある有志の人が建てたのだという。あたりは、静かな草原で、小さないろいろな野花在咲いている。しずかな森も近くにあって、おそらく、好適な散歩や野遊びの地であつたらう。

「幼稚園祭り」というのが具体的にどんなことをしたのか、私たちは知るよしもないが、私たちの想像の中で、「子どもたちの友」フレibelが子どもたちを連れてきて、とびはねたり、おどったり、うたったり、あるいは、べんとうを食べたりしたのであろう、ほほえましい情景がひろがった。やわらかな草原、しずかな森、美しい小川に、子どもたちの喜びの声がひびいたであらう。

記念の碑の裏側には、新しい学校が建っていた。おそらく、これが「フリードリヒ・フレibel上級学校」(東独では、六歳から十年間義務教育で、それをオーベルシュレという一つの学校で教育することになっている)であらう。天気がいいので遠足に出た児童たちが帰ってくるのが見え、そのうち二、三の子どもが自転車に乗って私たちのところにやってきました。

再び森をくぐって、住宅街の方へ歩くこと数分で、きれいに整った庭園の中にある、フレibel記念碑の前に出た。こ

れも、ま新しいりっぱな大理石の四角の柱に、フレibelの横顔の金色のリリーフがはめこまれている。私たちが写真で見なれた、彼の生誕百年記念に建てられたものには、この形の上にもう一つ、高く恩物の積み重ねのようなものがあり、柵をめぐらし、半メートルぐらいの高さの台座の上に立っていたが、おそらく、何かの機会に、前のをとりこわして、今のに建てかえたのではなからうか。

まわりにたっている背の高い樹々のたたずまいは、前の写真にあったものが生長したものと考えられる。老紳士によれば、まちのフレibelを愛する人たちが建てた、とのことであつた。花壇や芝生や石楠花の植えこみなどを、ぐるりと高い木立ちでかこんだ、美しい小公園である。

そこから、バスで数分いったところに、フレibelの愛妻ウィルヘルミネの墓があつた。道ばたに何げなく置いてある質素な、しかし親しみのある墓である。ところが、案内の老人は恥ずかしそうにいう。実は、これは彼女の墓ではない。すぐ、この横に彼女を葬った墓地があつたのを、児童遊園地をつくるために取りこわし、その墓碑だけをもってここに置いたのだという。たしかに、すぐわきに、新しい児童遊園地があつて、その上にだらだらとスロープがあがつてい

て、墓地があつたあとらしく荒れていた。五年あとのフレール生誕二百年のときまでには、きっと、彼女の墓を復元すると、すまなさそうにいった。

### 三、世界最初の幼稚園

その墓の前から、道が分れ、山の方にいく方に、フレール道との標識がたっていたが、彼によると、むしろこの道はフレールがかつて任んでいたカイルハウに通じる道で、十キロばかりの山道をフレールはときどき通つたのだという。おそらく、その間の峠で、例の「幼稚園」という名前を思いついたものであろう。

旧墓地の中を登り抜けると、小高い丘の中腹を横に走る見晴らしのいい小路に出て、百歩も歩かないところで、この下に、世界最初の幼稚園があるという。その道から、直角にまっすぐ、下の街路まで一歩半ぐらいの幅の石の階段が、五十メートルぐらいつづいて、下の街の道に出るようになっており、その左側の角の建物がそれだという。その階段の中頃の反対側のところに、フレールたちが、遊戯作業の場所として遊んだり、はたらいたりした広場（エスプラナーデ）のあとが残っていて、いまは一般の民家の庭先きみみたいな雑然と

したものになっていた。

下に降りて正面に廻ってみると、近くに立ちならんでいる建物と同じような、古ぼけた質素な三階建てである。地階（ケラー、穴倉と訳されることもある）の扉の上に、記念のパネルがはめてある。「ここに、フリードリヒ・フレールが一八三九より一八四四まで遊戯作業教育所を開いた」と読める。その扉を押して入ってみると、中は真っくらでがらくたの家具がつめてあった。現在、この建物は鉄道従業員組合のものになっていて、正面の上の方には赤い板に革命六十年（ソビエトロシアの）想起せよといったスローガンが掲げられていた。戦前に訪ねた人の報告では、ここは小学校の建物になっていた。

翌一八四〇の春、彼はカイルハウとの間の山道を登りつめて開けた眺望を楽しんでいるときに、自分のやっていることを「幼児の園」とよぶようにしよう、というインスピレーションを感じ、そう定めたのだといわれている。おそらく、このような美しい木々の緑や、やさしく起伏する山や谷や、しずかなブランケンブルグの街などを見おろしている間に、そのような考えがひらめいたのではなからうか、と私たちも同じ季節をここで経験しただけに、何だかうなずけるような気

がしたのである。

おそらく、それ以後はこの遊戯作業教育所を幼稚園とよぶようになり、六月二十八日には「一般ドイツ幼稚園」の連盟も発足することになった。だから、幼稚園の発足は四十年だといっても差支えないし、遊戯作業教育所からつづいていって考えれば、三十九年といってもいいであろう。しかし、こゝは四十四年までとあるので、それから先はどうなったかとか、この連盟の趣旨にもつづいてこの町に幼稚園ができたのはいつからかとも知りたかった。

話は少しさかのぼる。スイスのベスタロッチのところにしたフリーベルは、結局、一八三六年にはひき揚げてき、一八三七年からこのブランケンブルグに住居を定めることになった。「粉ひき小屋」といわれていた建物に住んだのであるが、現在でもそのまま残っている。

ここで、彼は「恩物」の構想をしだいに固めていくのであるが、同年には、「青少年のための、作業欲求育成所」と直訳されるような事業場をはじめることになった。彼は、そのころから、幼児の教育のことに心を傾けるようになり、この事業場で、両親たちに、遊びの中で幼児を育てることができ

るような、適当な「遊戯作業用品」を製造して、販売をすることに踏み切ったのであった。

このチューリンゲン地方は、森の国で、木材加工の名人たちもいて、小さな積み木のようなものをつくるには好適でもあったであろう。そして、親切な使用書を付けて、母親たちやいろいろな施設などに広めようとしたのである。三八年に発刊した「日曜新聞」も、フリーベルの教育思想だけでなく、このような遊戯作業用具を普及しようとしたものであった。その巻頭にある標語「来れ、われらの子どもたちと生きんかな」が、フリーベル関係の建物や碑に刻みこまれているのに、しばしば出合うのであった。

三十九年には、病身だったウィルヘルム・ミネ夫人を失い、その悲嘆の中に、この「遊戯作業教育所」をはじめることになったのである。のちに恩物とよばれ、強い影響を幼児教育界に残すことになる、こうした遊戯作業用具を実際に使って、四十人ばかりの子どもたちの教育をはじめたのである。「穴倉のある家」と伝えられているのがこのことである。

恩物といえば、今は幼児教育者の中に全く知らない人もあるくらいで、あんなものと首を振る人も多いであろう。しかし、あの冬の長い風土の中で、窓の小さい、ほのくらしい石の

部屋で、遊びを楽しむといったら、そして、森の国で木材も豊富で、加工の名人がいて自在に正方形や円筒を作ることができるとなど考え合わせると、あのくらしい小型の積み木になるのが自然ではなかったろうか。

のちに、固定化した使用法の指示も、はじめは、母親たちに適切なその遊び方を教える親切な心づかいではなかったろうか。現在でも、あの型の恩物を東ドイツでは盛んに使っていると思われるのも（むろん、もっと自由に創造的に構築するようになっているが）無理のないことと思わざるを得ないのである。

いまひとつ私が感じているのは、フレーベルが先ず恩物で自分でつくって売り出す、というようなことをやったことである。ともすると、彼の哲学なり思想なりがいわば瞑想的思弁的とみえるので、いわゆる観念的な人間のように思われているが、私はむしろ、果敢に自分の身を投げ出して事に当るような人ではなかったかと思う。

むろん、商売や経営が上手だったとは決していえず、しょっちゅう苦勞をしたのであるが、それだけに彼の身を捨てて事に当る生きざまに感動せざるを得ない。——この見すほらしい暗い部屋や、汚れた壁に触れて、私はこのような感じ

をいっそう強めたのであった。フレーベルが触れたであろうものに触れ、歩いたであろうところを歩いてみて、ここを訪れてよかったと思った。

私たちは、ここからまたバスにしばらく乗って、「粉ひき小屋」を訪れ、さらに、ここが彼が恩物を製造販売したという建物の前を通り、前述の古い方のフレーベルハウス幼稚園の前を通り抜けた。案内の老紳士は、これから、あの「幼稚園」という名前がひらめいたといわれる峠まで、連れていくという。予定以上に時間を食ったので、その時間がないという。では問道でいけばすぐだからというので、そちらの方にバスを走らせることになった。しかし、山道に入るとたちまち道がこわれていて通れなくなり、引返すことになった。私たちは、あのあたりだろうと、行く手の小高い頂をスナックプして引き返した。街角で老人と別れ、私たちは一略、フレーベルの生地のオーベルヴァイスバッハに向かったのである。

この土地のこと、ならびに東独の幼児教育については、機会を改めて述べることにしよう。

（十文字学園女子短期大学）